「日本的なるもの」の流行と変容

――昭和十二年という特異点――

田中康二

「日本的なるもの」の流行と変容

――昭和十二年という特異点――

田中康二

一、問題の所在

昭和戦前戦中期において「日本的なるもの」という用語および概念が流行し、猛威を振るったことは周知の事実である。満洲事変を経て「日本精神」という語が弘まり、北支事変とシンクロするように「日本的なるもの」という語が用いられた。その後も「日本的なるもの」という語は、新聞や雑誌の論説の中に現れ、折に触れて取り沙汰された。そうして、昭和十六年冬の日米開戦へとなだれ込んでいった。

そういった経緯を踏まえて「日本的なるもの」の消長をとらえたい。具体的にいえば、「日本的なるもの」という語が流行語であるとすれば、それはいかなる契機で発生し、いかなる転機で展開し、いかなる経緯で変容していったのか。つまり、「日本的なるもの」について、流行という側面から史的に跡づけ、この概念の歴史的意義を検討していきたい。

まずは「日本的なるもの」の流行を統計的側面から裏付けてみよう。昭和十年代の文学思想状況を横光利一と保田與重郎に即して追究した河田和子は、「日本的なるもの」なる語がいかに同時代のメディアに現れるかということを丹念

に調べ上げ、一覧にして見せた。[注1] これを雑誌論文・新聞論評・座談会・著書という四つのカテゴリーに整理し直せば、次のようになる。

媒体／年	雑誌論文	新聞論評	座談会	著書	合計
4	1	0	0	0	1
7	2	1	0	0	3
8	4	0	0	1	5
9	11	0	0	1	12
10	4	0	0	1	5
11	9	2	1	1	13
12	58	14	5	4	81
13	7	0	0	2	9
14	3	1	0	1	5
15	3	1	0	1	5
16	4	0	0	7	11
17	4	3	3	3	13
18	2	4	0	1	7
19	0	1	0	1	2
合計	113	27	9	23	172

これを見れば、「日本的なるもの」なる語が活字メディアに出現する頻度は、昭和十二年が突出して多いということが統計的にも明らかである。雑誌論文・新聞論評・座談会については、ともにこの期間に出たものの過半数を超える量の出版物が昭和十二年に刊行されている。著書に関しては必ずしも一番多いわけではないが、流行から遅延するという著書の性質を考慮すれば、うなづけるところである。実際のところ、以下の節で検討するように、昭和十二年に発表された論述や発言の中で、論者はしばしば「日本的なるもの」の流行に言及している。要するに、論者の中でも流行は意識されており、より正確に言えば、流行に自覚的であったということである。[注2] いずれにせよ、昭和十二年は「日本的なるもの」にとって特異点というべき年であったことは確かである。それでは、「日本的なるもの」は昭和十二年に集中的に論じられた結果、どのようなことになったのか。

以上のような問題意識のもとに、昭和十二年における「日本的なるもの」の内実について考えを深めたい。

二、中條百合子の整理

ひとくちに「日本的なるもの」といっても、普通名詞の複合してできた語であるから、その初出を正確に指摘することは難しい。それは「日本精神」や「日本主義」と同じく、気がつけば流行していたというのが真相である。だが、「日本的なるもの」の流行を吟味する上で、昭和十二年はある種の画期となる年次であったと言ってよい。前節で確認したように、新聞や雑誌など、当時の活字メディアに現れる傾向を見れば明白である。新聞記事や雑誌の特集や論題などに「日本的なるもの」という用語が目に付くようになるのが、昭和十二年であった。もちろん、「日本的なるもの」について論じたものをすべて検討するのが理想的ではあるが、そういうわけにもいかないので、一定の基準を設けて検討対象を絞る必要がある。そこで、ここでは複数の論考を対象にして、これを論評したものを扱うこととする。まず本節では、中條百合子が「日本的なるもの」について論及する言説を検討することにしたい。

まず中條百合子（一八九九～一九五一）の略歴を記す。中條はすでに大正年間よりプロレタリア文学作家として頭角を現していたが、ソ連訪問を機に共産主義に傾倒し、昭和十二年、文藝評論家にして共産党員でもあった宮本顕治と結婚した。後の宮本百合子である。中條は『文藝春秋』二月号に「文学における日本的なるもの―文芸時評―」と題して、「日本的なるもの」を論じている。[注3] 中條は『文学界』二月号の座談会に言及しつつ、その座談会の出席者である林房雄や岸田國士、室生犀星の発言を取り上げた上で、次のように議論を展開している。なお、引用に際しては、昭和十二年のリアルタイムの空気を重要視する立場から、原則として初出文献によることとした。以下同じ。

文学又は思想に於ける日本的なものゝ追求が近頃これらの作家達によつて熱心にされてゐる。万葉、王朝時代の精神が今日の生活に求められてゐる。

ここで中條が「日本的なるもの」に関して、これを「万葉、王朝時代の精神」と言い替えていることに注目したい。むろんそれは中條の論題に「文学における」という限定が付いているからであるけれども、少なくとも日本古代文学が想定されていることは確かである。それはこの論説の後半で「芭蕉の作物」が含まれていないことに言及していることからも明らかであろう。要するに、「日本的なるもの」とは第一義的には日本古代文学の精神を指すものであると認識しているのである。

それでは、「万葉、王朝時代の精神」という総称は適切なのか。中條はこれについても異議を唱える。次のような批判をしているのである。

私は、今日万葉、王朝の精神を唱へてゐる一部の作家が、我からそれを「抽象的な情熱」と云つてゐることを、実に意味ふかく思ふ。（中略）「抽象的な情熱」といふ十分の自覚に立つて日本の文学古典のうち最も生活と芸術とが融合一致してゐた万葉時代の、生命力に溢れた芸術の精神を唱へるといふ人々の矛盾を、私たちは何と解釈すべきであらうか。万葉とは対蹠的な罪業や来世の観念に貫かれた王朝の精神といふものを、万葉とともに、抽象的な情熱として愛するといふことは、殆ど理解しがたい迄に困難である。

中條は、作家たちが「日本的なるもの」を高唱する際に湧き上がる思いを「抽象的な情熱」と称していることに注意を促している。ここから、「抽象的」と言わざるを得ない理由を解明するのである。つまり、「生命力に溢れた」万葉の精神と「罪業や来世の観念に貫かれた」王朝の精神とは完全に乖離しているのであるから、これを統合して「日本的なるもの」と称するのは無理があるというわけである。要するに、それは具体的な輪郭を有し、明確な内容を包含する概念とはいえないというのである。

それでは現代につながる古典の精神を中條はどのように認識したのか。中條は如上の問題意識に連結する言説を「文

学上の復古的提唱に対して」（『都新聞』昭和十二年三月八日～十一日）と題して連載した。中條は近年、古事記や万葉集が一般読者によく読まれていることに言及した後で、次のように述べている。[注4]

今日の日本の文学の動きと密接なつながりをもって、古典研究が取上げられはじめたのは、特にこの二三年に目立って来た現象である。号令をかけて馬にのる人々も、文学的な感情をゆたかにして古事記や万葉集を読むとしたら、結構なことと云はざるを得ないのであるけれども、文化の全面を社会の現実の有様と照らしあわせて眺めると、理解はしかく皮相、単純なところに止まっておられないと思える。佐佐木信綱氏は、ああいう学派の歌人として万葉の専門家であり、研究著書、註解など権威ある労作がある。だが、それらの著作の完成した数年前は、今ほど万葉が一般に注目されていなかった。林房雄氏、小林秀雄氏等が万葉の精神などということは当時なかったのである。

中條は古事記や万葉集が当時の日本文学に影響を与えたのは、それほど古いことではないと言い、林房雄や小林秀雄の論説活動がにわか仕込みであると揶揄するのである。ここで少し時系列にしたがって、この言説の事実確認をしてみたい。この記事が書かれた昭和十二年を起点とすれば、「この二三年」とは昭和十年前後を指す。昭和十年といえば、保田與重郎が同人雑誌『日本浪曼派』を創刊し、盛んに批評活動をおこなっていた時期である。実際、中河與一や保田與重郎は「万葉の精神」というキーワードを用いて論陣を張っていた。[注5]

また、佐佐木信綱の件りは、佐佐木が代表となって編纂した『校本万葉集』をめぐる万葉集研究を指す。『校本万葉集』は明治末年頃、佐佐木信綱をはじめとして、橋本進吉・千田憲・武田祐吉・久松潜一の協力の下に国家事業として進められた。寛永版本『万葉集』を底本として、新出諸本を可能な限り収集して校合し、本文の復元を目指したものである。本文構築の厳密さのゆえに、日本古典学の雛形とされる。[注6] ともあれ、『校本万葉集』が出版された後に、ようやく万葉集への関心が高まってきたことを中條は指摘しており、「万葉の精神」などは急ごしらえのキャッチフレーズに過ぎな

いというわけである。

中條はさらに議論を進めて、「日本的なるもの」の内実に迫っていく。次の如くである。

今日の一般市民の生活感情と古典の感情とが、ぴったりそのまま同じであろう筈はないのであるから、全体として見れば、市民的常識の中に古典の知識は乏しいと云える。（中略）近頃は一方に万葉、王朝時代の精神ということが特殊な根拠の上に云われているけれども、現実に今日の日本人の生活感情の内部にものこっていて、美的感覚などの裡にマンネリズムとして余韻をひいているものは寧ろそれ以後の、「さび」とか「粋」とかの要素である。

「日本的なるもの」として中條が想定するのは、一般市民の常識とかけ離れた「万葉、王朝時代の精神」などではなく、今日の日本人の生活感情にも残っている「さび」や「粋」である。この提言は「日本的なるもの」の本質を考察する上で核心を突いている。というのも、「日本的」とははるか古代に範を求める必要はなく、なおかつ現実の感覚に根差したものとなれば、一時代前の近世を想定するのが穏当だからである。中條の「文学上の復古的提唱」に対する違和感は、その後の「日本的なるもの」の概念の拡がりを見据えているかのようである。

一般に「日本的」といえば、外国からの文化的影響を捨象できる時代、極端にいえば神代にまで溯及して、これを求めようとする傾向がある。たとえば、江戸時代の国学は古代に理想を見出し、古代文化を復元することに血道を上げた。そして、直前の時代である中世を激しく拒絶した。[注7] それが「復古」の文字通りの意味であると確信したからである。しかしながら、歴史的連続性の上で考えれば、一つ前の時代もまた「いにしへ（往にし方）」なのであり、地続きの感覚を有する前代にこそ文化の雛形があると考えることもできる。それはまったく見知らぬものではなく、目の前にはないが妙に懐かしいもの、いわば郷愁にも似た感情を呼び起こすものである。そういった意味で、中條の一連の論説は、「日本的なるもの」の指し示す内容を狭めるものではなく、むしろその概念を押し広げるものとなったといえよう。

三、小林秀雄の予言

前節で中條百合子の時評にも言及された小林秀雄について検討したい。小林秀雄（一九〇二～一九八三）は、東京帝国大学で仏文学を修め、フランス文学の翻訳等をしていたが、昭和四年に「様々なる意匠」が『改造』懸賞評論第二等入選作として発表され、文芸評論家としてスタートした。小林は昭和十年代には文芸評論家として一線で活躍していた。

さて、「日本的なるもの」に関して小林は一家言を持っていた。しばらく小林の言説に即して、昭和十二年における「日本的なるもの」の内実について検討していきたい。まず、読売新聞昭和十二年三月七日に、「文芸時評（4）」として「論壇の迷子―日本的なもの」のタイトルで文章をしたためている。その冒頭は次のように始まる。

「日本的なるもの」に就いていろいろ論じられてゐる。先日の朝日の漫画に「ヒユウマニズム」といふ子供が迷子になつて泣いてゐるところが出てゐた。近頃の新聞の匿名批評といふものは実にだらしがなくなつた。いつそみんな漫画に代へる方針で進んだらよいと思ふ。さうすればとにかく愛嬌は出て来る。それだけでもまだよい。

「日本的なるもの」の流行について言及することから始めるが、そこから小林は朝日新聞の一コマ漫画に触れている。それは東京朝日新聞昭和十二年二月二十三日朝刊に掲載された加藤悦郎の漫画で、「迷ひ子」と題したものである。その内容は、ヒューマニズムと名付けられた子供が泣いているところに紳士が二人通りかかった件りである。そこには、

「アーン、アーン、パパが居なくなつちやつたよオ」

「おい、迷ひ子だぜ」「珍らしくないよ、この街の名物さ……」

という台詞が付いている。泣いている子供の頭上に視線を転じると、そこには「文壇街一丁目」という街区表示板が掛

かっているという構成である。

小林はこの後、漫画の出来の良さに比して匿名批評の劣化を問題にするのであるが、それは本題から外れるので割愛する。この風刺漫画の言わんとするところは、かつてヒューマニズムが文壇で流行したことと、今ではそれが行き場を失っていることであるが、そのことを軽妙に戯画化しているわけである。冒頭はその漫画を踏まえた叙述であると思われる。小林の時評は続く。

「ヒユウマニズム」が迷子になるのも仕方がない。いづれ「日本的なるもの」も迷子になる運命にあるのだから。一般に批評家といふものは商売柄言はば問題解決趣味ともいふべきものを持つてゐるので、この趣味は問題の難解さを嫌ふと言ふよりもこの趣味にかゝつては一体難解といふ問題が存在しないのである。この趣味が迷子を沢山製造する。迷子の行列が見えてゐる人には、「日本的なるもの」の問題もさう簡明ではない。迷子の生みの親は同じだからだ。その同じだといふ処に目をつければ、問題は「日本的なるもの」とは何か「民族性」とは何かといふ様な抽象的な問題でない事はよくわかるし、「日本的なるもの」が文壇的に迷子になつてもちつとも差支へないわけである。

ここで小林が語っているのは、「日本的なるもの」という概念は「ヒユウマニズム」と同じく、文壇が生み出した「問題」であって、批評家によって仕掛けられた自作自演のパフォーマンスにすぎないというのが文意であると思われる。したがって、批評家が飽きて見放した途端、それは「迷子」の仲間入りをするわけである。かつて文壇を賑わわせたヒューマニズムも、今では誰も感心を持たずに漂っているという。「迷子」とは流行遅れになったイデオロギーのメタファーである。いずれ「日本的なるもの」も迷子になる運命にある、すなわち、流行遅れになって忘れ去られ、相手にされなくなってしまうと予言しているのである。

小林はヒューマニズムを比較の対象として、さらに「日本的なるもの」の先行きについて考察を加えている。

最近の「日本的なるもの」の問題が漠然としてゐるのはこの前の「ヒユウマニズム」の問題が漠然としてゐるのと同じ事で、その点は「現代の不安」といふ問題とも離して考へる事は出来ぬ。ヒユウマニズムの問題が起つた時も漠然たるヒユウマニズムを限定せよといふ論があつたが、今度も「日本的なるもの」を限定せよといふ論も現れるのは当然だと思ふが、限定すれば迷子が一人増えるだけだといふ事は確信してゐる。

この段落で小林は諸概念が時代遅れになり、迷子になるメカニズムを簡潔に指摘している。ここでのキーワードは「漠然」と「限定」である。ヒューマニズムと同じく、「日本的なるもの」も漠然としているから俎上に載るのであって、これを明確に限定して論じると解決される。問題の射程を厳密に測定し、その範囲を限定してアプローチすれば、たいがいの問題は解決するわけである。小林はさらにこれを「現代の不安」という問題に寄せて論じているが、この例示は卓抜である。というのも、漠然としているからこそ「不安」なのであって、対象が明瞭になれば、それは心配事として解決の突破口になる。たとえば、先行きの不安といえば憂鬱になるけれども、それが経済的問題なのか、人間関係なのか、あるいは政治問題なのか、といった内実を限定すれば、解決への道が開けるものである。以上のことから、迷子になるというのは、未知の迷宮に紛れ込むことではなく、むしろ問題を既知の領域に追いやることであろう。文壇では、問題は既知の領域に入った段階で解決されたと見なされ、誰からも相手にされないわけである。有り体に言えば、文壇の飯の種にならなくなると、捨てられるのである。

以上のような小林の予言は半分当たり、半分外れた。つまり、文壇の中では「日本的なるもの」はもてはやされる一定の期間を経て忘れ去られたが、より広い言論界においてはしばらく命脈を保ったのである。(注8)

四、小林秀雄の論評

満洲事変に端を発した日本精神論は、昭和十二年になって新たな展開を迎えた。「日本的なるもの」という概念が多くの論者によって取り沙汰されるようになったのである。前節で確認したように、小林秀雄はヒューマニズムとの関係でそのことを正確に指摘している。さらに小林は本格的に「日本的なるもの」の解析に突き進んでいった。東京朝日新聞の昭和十二年四月十六日から十九日にかけて朝刊に四回分で連載された「「日本的なもの」の問題」という時評において論じている。それらには「常識が困る理窟」（十六日）、「文化均衡の悩み」（十七日）、「現代の不安から」（十八日）、「個性的イメージ」（十九日）という見出しが付されている。

さて、小林はこの連載に関して、「四月号の雑誌には、所謂「日本的なもの」に関する論文が非常に多かつた」という一文で始めている。実際に当時刊行のメジャー雑誌には、「日本的なもの」に論及する多くの論文が掲載されていた。既述したように、それは年初からの傾向であった。問題は数多くの論文の中から小林が選択した論題および著者である。論題を明示し、論文の中身に論評を加えているものは、次の四本である。なお、序列は小林の取り上げた順により、引用は小林による論文内容の要約である。

（一）大森義太郎「日本への省察―「日本的」とは何ぞや―」（『中央公論』四月号）

日本歴史を遡つて、外来的なものつまり日本的なものでないものを出来るだけしやくひ出したが、残念な事には「茫々たる神話の世界」だけしか残らなかつた。

（二）向坂逸郎「政治と文化の相剋」（『改造』四月号）

現代には国民の代りに階級があるだけだ。現代の日本国民は「緊密な統一体としての民族」なぞ意識してはをらぬ。現に民族のない処に民族文化が育つわけがない。無理にでつち上げようとすればフアツシズムになる。被支配階級は国内的である事も、国際的である事も少しも気にかける必要のない歴史的地位を持つた階級だ。

（三）三木清「知識階級と伝統の問題」（『中央公論』四月号）

伝統とは身体的になつた文化、言はばパトスの裡に沈んだロゴスであり、これが日に新たに伝承されて行くには、パトスが自己を否定し、ロゴスに於て却つて自己を肯定するといふ運動が行はれなくてはならぬ。つまり、民族の自己否定を媒介とすることなしには真の民族的文化は作られない。

（四）戸坂潤「日本の民衆と「日本的なるもの」」（『改造』四月号）

日本の民衆こそ唯一の日本的なるものと見做されねばならぬといふテエゼに、ブルジヨア文学者は言はば内から外へ、プロレタリヤ文学者は言はば外から内への自我の具体化といふ動きから触れる事を強ひられてゐる。

「日本的なるもの」に関して、小林が俎上に載せた論文に対して、ある意味で実に丁寧に紹介していると言ってよい。数ある論文の中で、とりわけこの四本を選んで論評した理由は何なのだろうか。

この顔ぶれと論述内容を一覧すれば、ある傾向が浮かび上がる。その共通点を探るため、四人の略歴を見てみることにしよう。まず、大森義太郎（一八九八～一九四〇）は、東京帝国大学卒業後、助手を経て同大助教授となった。昭和三年の三・一五事件に連座して東大を辞職し、以後マルクス主義経済学者として、そして労農派の理論的指導者として活動した。次に、向坂逸郎（一八九七～一九八五）は、東京帝国大学卒業後、助手を勤め、ベルリン留学を経て九州帝国大学教授に着任した。昭和三年の三・一五事件の余波で大学を辞職し、労農派の論客として活躍した。第三として、三木清（一八九七～一九四五）は、京都帝国大学哲学科を卒業し、欧州留学を経て法政大学教授となった。マルクス主義哲学

について精力的に発表したが、治安維持法違反の罪で逮捕拘留を機に大学を辞職した。最後に、戸坂潤（一九〇〇～一九四五）は、京都帝国大学哲学科を卒業し、三木清の後任として法政大学教授となった。三木とともに唯物論研究会で活動した。

以上のように、四人の共通点はマルクス主義的立場から経済学や哲学を修め、共産主義活動に手を染めた学者であるという事実である。そのような履歴や学問的背景は、当該論文の用語法にも反映している。それは大森義太郎における「茫々たる神話の世界」、向坂逸郎における「被支配階級」、三木清における「民族の自己否定」、戸坂潤における「日本の民衆」である。それぞれの原文における用法とその意味するところを確認しておこう。

まず、「茫々たる神話の世界」（大森義太郎）は、「五　上代日本のすがた」に現れる。上代日本にもあったものとして、家族制度と民族感情を挙げ、その内実を検討した結果、二つとも必ずしも上代より現代まで続くものとは言えないと結論づける。その最後の段落である。

わが上代に見られたと云ひ、純粋に『日本的』なものだと称されるもの、そのうちでも最も大切な筈のふたつ、家族制度と民族感情、……である。我々は……、遂に……云はなければならぬ。それなら、上代の先きは？　茫々たる神話の世界につらなつてゐる。

この結論は何を意味しているのか。もちろん、節全体の構成からある程度は論者の主張を読み取ることは可能である。だが、これだけの伏字があれば、この段落だけを読んでも文意は不透明である。そもそも、本節にはおびただしい量の伏字が溢れている。禁忌に触れ、検閲に引っかかると編集者が判断し、伏字にしたのであろう。

一般に治安維持法は施行および数度にわたる改正を経て、言論統制や思想弾圧を行うために、内務省警保局保安課に所属する特高警察が検閲および発禁処分を出すという手続きであるが、実際にはそれ以前に決着が付いていた。官憲へ

の忖度が働いて、編集者が発行前に伏字にして事なきを得たわけである。大森論文における伏字のおびただしさは、言葉狩りであることは事実だが、それは事を荒立てないために出版社内部の自主規制の現れであった。それだけ禁忌に触れる事柄であったのであろう。なお、小林の論評は後で検討する。

次に、「被支配階級」（向坂逸郎）は、当該論文六節の第一段落に現れる。向坂は近代日本の市民社会が前近代の封建社会から推移するのに際して、国民文化という形で統合された文化は存在しないと断言する。それでは今目の前にある文化は何なのかと自問し自答する。

さうだとすると、吾々は、如何なる意味で、民族的なるもの、日本的なるものを問題にするか。吾々には、国民文化といふことはもう問題でない。それはさういふ名で示された支配階級の文化であることを知つてゐるからである。吾々は、被支配階級として、吾々の文化の創建を問題にしてゐる。被支配階級は、国外の同様の階級と対立する何等の理由もない。毛色が異ふといふことは抗争の理由にならぬ。被支配階級は、自分自身の文化を主張する。そして、それは、国内における伝統の彼等流による摂取のみならず、国際的文化の摂取と融合とによつて成長する。被支配階級の文化のための要求は、かくて、国民文化ではなく、国際文化である。それは、国内的であることも、国際的である事も、少しも気にかける必要のない歴史的地位をもつた階級であるからである。

向坂の答えは「被支配階級の文化」である。そして、それは国の内外を問わず、同様に存在するというのである。そうであれば、「民族的」や「日本的」といったものよりも、「階級的」というものの方が共通点が多いことになる。これは万国の労働者階級の文化は団結できると言うに等しい。実際にそのようなことを意図していたのであろう。向坂によれば、「民族」や「国民」といった概念は「階級」の前では無価値だからである。

小林は大森義太郎や向坂逸郎のこういった議論を取り上げて、「常識が困る理窟」だというのである。小林は両者の

論を理窟では理解できるが、文化から「民族性」を捨象する議論には賛同できないという。「民族性」とは、理論武装しても決して消すことのできない文化的伝統であるというのである。小林にとって「伝統」や「民族性」は自明の概念だからである。

さて第三として、「民族の自己否定」（三木清）は、当該論文三節に現れる。三木の議論は大森や向坂ほど急進的ではない。だが、三木独特の用語体系の中で議論を構築している。したがって、その基幹となる思考法をすくい上げる必要がある。それでは三木の論述作法はどのようなものなのか。それは次の引用箇所に現れている。

しかしながら民族も歴史的に形成されたものであるやうに、伝統はもと身体と精神との、パトスとロゴスとの統一として弁証法的なものであり、弁証法的に発展してゆくものである。身体的なもの、パトス的なものとしての伝統は新しい文化によつて否定されて更に新しい伝統が作られる。すべて文化はパトスが自己を否定し、ロゴスにおいて自己を肯定する時に生れるのである。民族の自己否定を媒介とすることなしには真の民族的文化も作られないであらう。

三木は「民族」の形成と「伝統」の形成を相関的にとらえて、それが歴史的に形作られる過程を問題にする。その際に用いられるのは、「パトス」（情念）と「ロゴス」（論理）の弁証法的展開である。弁証法とは、所与の命題に対して反措定を企てることによって、より高次の命題に止揚されるという論理展開である。そこには必ず否定を伴う。三木はこれを「伝統」の形成に応用し、「民族」の文化は一旦「自己否定」されることによって、「真の民族的文化」が形成されると説いているのである。

小林はこういった三木の議論および結論には一定の理解を示しているが、そこで用いられる弁証法は、古来日本にも存在したと言う。つまり、西洋式の思考法を用いなくても、日本の文化現象を論じることはできるというのである。な

お、小林は「弁証法」をあえて「ディアレクティック」と言い換えている。つまり、三木が指摘する西洋流の「弁証法」を小林は日本流の「ディアレクティック」の中に見出そうとしているわけである。このような皮肉めいた物言いは小林の意図を見えなくするが、要するに、三木の主張ではなく、三木の導出法を批判しているのである。

最後に、「日本の民衆」（戸坂潤）は、論文のタイトルにも入っている用語であるが、それは戸坂論文の鍵概念である。戸坂は「日本的なるもの」が論じられる現状を次のように批判している。

> 日本的なものを検出すると称して人々のやつてゐる処を見ると、夫が万葉の直観的豊醇であつたり、或ひは又源氏の「もの、あはれ」であつたり、さうかと思ふと中世的な武士道であつたり、徳川期の義理人情であつたり、であつて、その止め度のない日本的なもの、定性分析の無意味さは別としても、一向それが現代の日本の民衆とつぎ合はされてゐないのである。

戸坂は世の論者が「日本的なるもの」を論じて隘路に落ちていると述べているのである。しかもそれはかなり具体的な論者像を想起させる。たとえば、「万葉の直観的豊醇」は保田與重郎や中河與一であり、「源氏の「もののあはれ」」であれば佐藤春夫であることは、この頃の読者であれば誰にも明らかである。そういった中で戸坂が問題にするのは、「日本的なるもの」の「定性分析の無意味さ」ではなく、「日本的なるもの」が「現代の日本の民衆」とかみ合っていないことである。民衆を中心に据えて物事を考えるのが戸坂の信条だからである。それは結論部にある次の言説からもわかる。

> 日本民衆の利害を離れて、日本的なものを論じることは出来ない、許されない。日本民衆こそ唯一の日本的なものと見做されねばならぬ。日本的なるものは日本人の伝統にあるとしよう、だがその伝統を処理すべき当の主人は、正に日本民族であつて、あれこれの「伝統的」なインテリゲンチヤなどではないのだ。今は民衆に伝統を強制する

者は用心せねばならぬ。

「日本的なるもの」と称して民衆に「伝統」を押しつけることを強烈に批判する。「許されない」という表現を見れば明らかであろう。この強い調子に対して、小林は「元来が煽動や強制によつて決して成功し得ない文学といふ仕事が、日本的な問題に関して氏の恐れる様な方向に歩き得ようとは思はぬ」と軽くいなしながらも、伝統に関する概念規定を決して変えようとしない頑固さも持ち合わせている。(注9)

以上検討したように、小林秀雄は「日本的なるもの」を論評するにあたって、手当たり次第に論文を批評するのではなく、「日本的なるもの」に対して否定的な見解を有する論者を対象としたと結論づけることができる。なかには戸坂潤のように、小林と論争を繰り広げた者もいた。そのような、いわば論敵を出汁にして、小林は「日本的なるもの」のリアルタイムの姿を浮き彫りにしたと言ってよかろう。

五、保田與重郎の総括

本節では保田與重郎を通して「日本的なるもの」を眺めてみたい。まずは保田の略歴を概観する。保田與重郎（一九一〇～一九八一）は、東京帝国大学美学美術史学科を卒業し、本格的に評論活動を始めた。在学中に『コギト』を創刊し、昭和十年には『日本浪曼派』を創刊して、日本古典の伝統に根ざしたロマン派の文学運動を立ち上げた。ある意味で保田は昭和十年代における「日本的なるもの」を領導した代表者の一人ということもできる。したがって、「日本的なるもの」をめぐって数多くの論考を発表し、たくさんの座談会で発言をしている。

そういった中で、本節では保田が「日本的なるもの」について執筆された論考の総括をおこなっているものを対象に

したい。論題は「「日本的なもの」批評について―文藝三月号に現れた「日本的なもの」についての総括批評」（『文学界』昭和十二年四月号）である。その冒頭で保田は「「日本的なもの」について、「文藝」三月号を見ると九人の人々が何かを語つてゐる」と書き出している。「語つてゐる」という表現からもわかるように、保田が問題にしているのは、論説だけでなく討論会の発言も含まれている。保田が指摘する九人とその論題は、雑誌の掲載順によれば次の通りである。

（一）〔討論会〕小林秀雄・窪川鶴次郎・片岡鐵兵・三枝博音・河上徹太郎・中野重治「現代文藝思潮の対立―民族文化の問題を中心に」

（二）青野季吉「「日本的なもの」と我等」

（三）尾崎士郎「高言放談」

（四）矢崎彈「「もののあはれ」の錯乱―伝統への疑問符」

保田は以上の論者すべての発言および叙述を取り上げ、これに論評を加えている。保田の取り上げる順序は、雑誌の掲載順と若干の違いがあって、さきに個別論文三本を取り上げ、その後で討論会の内容を論評している。それは保田の関心のありかを示しているといえる。つまり、保田は論文三本の方に強い関心を抱いていたと推定されるのである。以下では、その序列にしたがって個別論文三本に絞って、保田の総括の目指すところを検討していきたい。

まず、青野季吉「「日本的なもの」と我等」評である。保田は青野の評論活動を「過去の時代に圧迫されてゐた階級の文化をさぐりたいといふ気質」と見ている。それは青野の次のような言説を受けてのことと推定される。

真に「日本的なもの」の探求や讃美と云ふからには、また、そこまで深化され、広化されるのが本統であり、貴族的文化だけがひとり「日本的」な文化だといふ理由は、絶対に成り立たぬのである。それは民衆や被支配階級も、亦儼として日本民族の体幹であつたといふ単純な事実は、絶対に否定できないからである。

これは文化が支配階級の専有物であり、貴族的文化がその代表であるとする従来の説を批判したものである。「民衆や被支配階級」にも文化が存在したという歴史観であり、最も典型的な唯物史観による観点であると言ってよい。そこから青野は柳宗悦の言葉を引用しつつ、工芸の世界における民芸品の価値を貴族の芸術よりも高く評価する。つまり、民衆や被支配階級の文化を貴族文化に匹敵する優れたものであるとするのである。このような被支配階級の文化を重視する見方に対して、保田は一概にこれを否定するわけではないが、近世後期文学を例に取りながら、次のように述べている。

江戸末期の戯作者は時代への呻きをぶつぶつと陰気な戯作文でまぎらせてゐたのである。かういふものを冷淡な客観主義は「主張」を知らないものと云ふ。しかしその当時代の変革の指導者たる復古主義者は、異朝の歴史人物を論讃し、又我朝の古代史を論賛して、颯爽とした主張を描いてゐたのである。かういふものは戯作精神でなくして、丈夫ぶりである。僕らの専ら尊ぶものは、勤番者の根性でなくして、浪士の丈夫ぶりである。

保田は民衆文化と貴族文化を比較するのに際して、「戯作者」と「復古主義者」という対立軸を想定している。「戯作者」とは、当世の読本や人情本、あるいは滑稽本といった戯作の作者であり、俗文学の担い手である。それに対して、「復古主義者」とは順当に考えれば国学者であろう。「丈夫ぶり」（ますらをぶり）とは、国学者賀茂真淵が提唱した万葉主義のことである。要するに、当世の俗文化の担い手である戯作者よりも、万葉の精神を探究する国学者の中に日本的文化の継承者の像を描き出しているわけである。(注10)

次に、尾崎士郎「高言放談」評に移ろう。尾崎は「日本的精神」の探究について触れて、「現代の文学者にとつてもつとも緊切な問題は日本的精神を古典の中にさぐる前に現代の民衆の中にさぐることである」とした上で、次のように論を閉じている。

「万葉に還れ」といふ声は万葉の精神を現代に見出すことにおいてはじめて意義を生ずる。今日をはなれて天平の文化も法隆寺も何するものぞやだ。むしろ万葉に生きるためには「古典を焼却せよ！」と叫ぶことに日本的精神はあたらしい出発を持つのである。

古典の精神を知ることは、現代という文脈の中ではじめて成し得る。だから、「万葉に還れ」という標語を実践するためには、古典を焼却しなければならないというのである。これは興味深い逆説である。古典の精神を体得し、実践するためには、物質としての古典を湮滅しなければならないということになるからである。しかしながら、尾崎がここで提示したのはそういった逆説ではなく、むしろ古典文化の廃棄というアイロニーであったと思われる。声高に「万葉に還れ」と叫ぶことに対する皮肉である。

むろん、「万葉に還れ」を高唱した一人である保田が、そのような皮肉をやり過ごすはずがない。保田はここを取り上げて次のように言っている。

「むしろ万葉に生きるためには古典を焼却せよ、と叫ぶことに日本的精神はあたらしい出発を持つのである」と尾崎氏は結んでゐる。だがさういふ主張がされるには日本の文化は進んでゐない。まだ十八世紀をさへ克服してゐない。

この受け止め方は、あたかも条件が整えば古典を焼却する用意があるかのごとく読み取ることもできるが、真意はそこにはない。保田には明治以降の日本の文化が前代の文化すら超えていないという思いがある。もちろんそれは謙虚さによるものではなく、むしろ文化の現状への憤りによるものであった。保田の攻撃の鉾先は近代以降の文化政策に向かう。次のように続けている。

尾崎氏は「日本的なもの」流行をこだはつてゐるらしいが、その点充分に僕らにもわかるのだが、この名言は現代

の事情の下次のやうにいふのが正しいのである。

「むしろ世界に（近代の世界精神はヨーロッパ精神）生きるために、日本風に移入されたヨーロッパ的古典を焼却せよ」。かういふところに、近ごろの若い日本の雄大な世界精神の変型がある。

保田の尾崎論文への批評はここにあると言ってよい。古典を湮滅せよという尾崎の結論は、近代以降日本に移入されたヨーロッパの古典を湮滅せよと言い換えられた。保田は尾崎の結論をあえて「この名言」と呼んでいる。それは賛辞ではない。もちろん皮肉である。保田には、皮肉を吐けるほど余裕があったと言うこともできる。引き続き、保田は近代以降の日本文化の本質と問題点を指摘することになる。

第一に実用主義風な移入を反省することである。尾崎氏の西欧的教養も、青野氏が「奇蹟」とした西欧的教養も、氏らの特権と云ふまい、あきらかに明治以降専ら政府が指導して日本の古典を焼却してきた結果の特権である。

保田が糾弾するのは、尾崎や青野の個人的に身に付けた「西洋的教養」ではない。それは明治以降に政府が組織的に「西洋的教養」を実用主義的に移入し、逆に「日本の古典」はこれを「焼却」して来たことによる帰結だというわけである。したがって、尾崎がことさらに「古典を焼却せよ」と言わなくても、すでに焼却されつつあるというのが保田の認識なのである。保田の批判は個人の論考への批判を超えて、近代以降における日本の文化政策にまで及んでいるわけである。ここに保田與重郎の一貫した姿勢を読み取ることができよう。

最後に、矢崎彈「「もののあはれ」の錯乱―伝統への疑問符」評を見てみよう。矢崎は佐藤春夫「日本文学の伝統を思ふ」（『中央公論』昭和十二年一月号）に記された「もののあはれ」論を俎上に載せつつ、日本の伝統とその讃美者を激しく罵倒する。矢崎の立場は最初の節に開陳されている。矢崎は「古典精神」や「民俗の信仰」を高唱する「復古派」と、それを一蹴する「今日の進歩派」という両派から一定の距離を取ると宣言しながらも、次のように述べている。

といふのは僕はまだこの濁世に愛想つかして古典の念仏唱へるほど今日の現実に絶望もしなければ、これこそと信仰できるわが民族の特性が見つかりもしないからだ。僕は何より、まだ今日的現実のリアリズムに未練がある。解釈学の蟄居に耽りたいといふのではない、古典より現実に魅力を感じ、民族の特性より世界性の解釈に野心が燃えるからだ。

矢崎は「日本的」や「民族的」という概念を闇雲に葬り去ろうというわけではない。その点で「今日の進歩派」とは一線を画するものである。だが、「復古派」への違和感はぬぐい去ることができない。つまり、「古典」や「民族の特性」といった「日本的なるもの」よりも、「今日的現実のリアリズム」の中にリアリティーを感じているというわけである。このような問題意識を出発点として、長谷川如是閑による「話せばわかる」論、小林秀雄による「日本的伝統」論、佐藤春夫による「もののあはれ」論を次々に論破していく。そうして、論考の末尾で次のように述べている。

つまり今日の現実の歴史を識るものには、過去の精神復興、ことに万葉精神の復興熱に誘はれる人達がアナーキストに見えて来る。今日の浪漫派の一部はアナーキストだ、たゞ実践の方法に盲目だといふだけである。

「万葉精神の復興熱」や「今日の浪漫派の一部」といった用語から、この論考は保田與重郎を狙い撃ちにしていたことがわかる。しかも、かなり苛烈な批判と言ってよい。これを受けて、保田は矢崎を攻撃し、完膚無きまでに論破すると思いきや、きわめて冷静にあしらっているのである。保田は矢崎の論が諸家の見解のつぎはぎで、独自の論が皆無であり、それが現代の批評文の典型であることを指摘した上で、そのことにむしろ同情的ですらある。保田の矢崎評は次のように結ばれる。

矢崎氏の批評文が、今の文壇の犠牲者たる批評文の一つの典型である、即ち「虚無とならず、理想への闘ひとならず、憤懣が諷刺に伸びえず、直ちに自己破裂にいたる」心境批評文の一つである。

ここには保田の言い分のすべてがある。カギ括弧内の文言は矢崎論文の中に引用された、現代日本文学の絶望感を言い当てた岸田國士の言葉である。つまり、保田は矢崎の引用を再び用いて、矢崎に対して憐れみの情を掛けているわけである。「今の文壇の犠牲者」という語がそのことを雄弁に物語っている。保田の矢崎評には王者の風格が漂っていると言ってよかろう。

以上検討してきたように、保田の「日本的なるもの」の総括は、よく似た立場の者に自らの見解を代弁させるのではなく、まったく立場を異にする論を俎上に載せて、これを丹念に批判していき、最終的に自らの立場を際立たせるという体のものであった。そうすることによって、「日本的なるもの」に関する議論は洗練され、概念の輪郭はよりいっそう鮮明になったということができよう。

六、昭和十二年下半期の転機（上）

昭和十二年に「日本的なるもの」が爆発的に流行した。その内実は、ここまで縷縷確認してきたとおりである。ただし、それらはすべて昭和十二年の上半期に発表された言説ばかりであった。実はそれには理由がある。上半期の方が下半期よりも圧倒的に関連記事が多かったのである。試みに第一節でまとめたデータをさらに月別に細分化して表にすれば、次頁のようになる。

これを見れば明らかなように、上半期の活況に対して下半期は沈静化とでも称すべき状態となっている。より厳密に言えば、合計二桁を生産していた七月期までと、一桁前半の八月期以降では、全く数値が異なるのである。流行とはそういうものだという見方もできるが、それにしても余りにも極端な変化である。これについては考えられる理由が一つ

ある。七月七日に起きた盧溝橋事件に端を発した北支事変である。(注11)

媒体／月	雑誌論文	新聞論評	座談会	著書	合計
1	2	0	0	0	2
2	3	1	0	0	4
3	8	3	1	0	12
4	15	2	1	0	18
5	9	3	2	0	14
6	7	2	0	1	10
7	8	2	0	2	12
8	1	0	0	0	1
9	2	0	1	0	3
10	1	0	0	1	2
11	0	0	0	0	0
12	2	1	0	0	3
合計	58	14	5	4	81

北京郊外の豊台に駐屯していた支那駐屯軍歩兵連隊の中隊が盧溝橋付近で夜間演習を行っていたところ、中隊に向けた発砲と日本兵の行方不明事件が重なって偶発的な小衝突の事態となり、一ヶ月後には上海での市街戦に発展して全面戦争化した。(注12) 盧溝橋事件は各新聞の一面で報道され、日本国内でも関心の的となった。

もちろん、戦争が勃発したから「日本的なるもの」というテーマが下火になったと考えるのは早計である。逆に対外戦争が「日本的なるもの」への興味をかき立てたと考えることもできるほどである。それゆえ戦争と文学的テーマの間に直接の因果関係を想定することは難しい。しかしながら、「日本的なるもの」というテーマが突如として雑誌や新聞から退潮する兆しを見せたことは、外形的には戦争勃発と深い関係があると言ってよい。新聞や雑誌では戦争報道や戦争をテーマとした特集が組まれ、それに関連する記事が新聞紙面を賑わし、特集論文が雑誌の誌面を埋めた。試みに総合評論雑誌が事変の翌月に組んだ特集テーマを提示しておこう。

『中央公論』八月特大号―特輯・北支事変
『文藝春秋』臨時増刊号―日支の全面激突
『改造』八月号―蘇・支問題号
『日本評論』臨時増刊号―抗日支那の解剖

このように総合月刊雑誌は、北支事変の勃発の翌月には特集テーマを組んで多くの論文を収載している。そうして、それまで関心を集めていたテーマは、必然的に隅に追いやられ、人々の関心は移り変わっていった。新聞や雑誌から「日本的なるもの」を扱う論文が退潮したのは、流行が終焉の時を迎えたわけではなく、全体に占める割合が相対的に低くなったということである。

ひとまず七月期から八月期に掛けての変化は、以上のような筋立てで説明することができる。だが、事変の勃発によって変わったのは、数量の問題だけではなかった。その内実においても変容を余儀なくされた。つまり、「日本的なるもの」は質的にも変化したのである。

たとえば、すでに『文藝』三月号に関連論文を発表していた青野季吉と矢崎彈は、事変後の九月にそれぞれ次のような論文を発表している。

青野季吉「戦争とインテリについて」（『改造』九月号）
矢崎彈「中国で眺めた日本的性格」（『新潮』九月号）

タイトルを見ても明らかであるが、これらの論文は北支事変を受けて執筆されたものである。その内容を見ていくことにしたい。まず、青野の論文である。

青野は「北支事変――戦争にたいするインテリの心理の内部をたたいて見たら、そこにはかなりに複雑したものがあ

るに相違ない」と語り出し、インテリが戦争に直面した際の混乱ぶりに言及する。インテリは現状を無前提に肯定することはなく、批判的であり、知性的であることによって現状を認識する。しかし、それがいつも正しいとは限らない、とした上で、次のように述べている。

だが、インテリのその批判性や知性は、つねに十分に健康的だとは云へない。特に戦争の場合のやうに、あらゆる意味において社会の平常性が失はれて来るときには、それが過度になつたり、歪曲されたり、或は逆立ちしたりする危険が多い。さうなつたら、なまじ批判性や知性をもつてゐるだけに、反つてインテリはひどい逸脱を演ずるのだ。

言論によって社会を先導する力を持つインテリがバランスを失うと、「過度」や「歪曲」や「逆立ち」といった「逸脱」に向かうというわけである。そして、そのような「逸脱」が戦時において特に起こりやすいことを指摘しているのは、興味深いと言うほかはない。そして、次のように続ける。

いつぱんに戦争の場合ほど、祖国とか民族とか云ふものが、直接的に人々の意識に迫つて来る時はない。この国のインテリ大衆は、階級的なものについての認識は、過去の一定の時期を通じて、かなり豊富に与へられたと云へるが、祖国や民族についての意識に注意を呼び醒されたのは、つい近年に始まつたことだ。

これが北支事変勃発の二ヶ月も経たない時期のものであったことを考慮すれば、この言説は非常にリアリティーがあると言ってよかろう。戦時において「祖国」や「民族」という概念が前景にせり出してくるというのである。青野が社会や文化を分析する際に第一に考えるのは、支配・被支配という「階級」の問題であると前節で確認したが、そこに「祖国」や「民族」が指標として加わったことに言及する。これは言うまでもなく「日本的なるもの」に深く関係している。青野は続ける。

それ以来、特にかの「日本的なもの」の論争を通じて、この国のインテリ大衆は、階級的なものの認識と、民族的なものの認識とをいかに結合するかについて、思ひ迷つてゐる。

この一文には、青野を含む「インテリ大衆」の苦悩がにじみ出ている。当時は外国との戦争状態のことを「非常時」と称したが、非常時における祖国や民族という概念は立場の別を越えて悩ましいものである。そもそも、青野が「「日本的なるもの」の論争」に言及するのは、青野自身がそれに自覚的であったことを雄弁に物語る。自身もまたその論争の当事者であった。そこで、青野は「階級的なもの」と「民族的なもの」との両立という問題に直面する。その問題をいかにして解決したのか。

さうしたインテリ大衆にたいして、戦争は、祖国及び民族にたいするハツキリした意識を持つことを要求する。そしてまたインテリ大衆も、何をおいても先づ祖国及び民族の保全のために献身しなければならぬことを感ずる。

ここに至って、戦時における「祖国及び民族」の割合が増していき、ついに持ち重りがするまでになるのである。つまり、戦争（北支事変）が認識を変えたのである。おそらくこれが昭和十二年八月のリアルタイムの空気だったのであろう。なお、「インテリ大衆」とは、この時期の左派系知識人の自称である。(注13)

次に、矢崎彈「中国で眺めた日本的性格」を見てみたい。矢崎は昭和十二年の五月末に中国に渡り、六月末まで上海に滞在した。帰国後に北支事変と第二次上海事変が勃発し、それを受けて書かれたものである。事変発生の問題は後で検討することとして、矢崎は中国訪問の前と後とで日本人観が変化した。次のように述べている。

僕は上海に行くまで、日本民族とは、よく困窮に堪へて海外雄飛にもつとも適した伸縮性に富み、垣をつくらず、あらゆる障壁をも侵して繁栄できる民族だと信じてゐた。ところが、上海における日本人の生活姿態から以上の予想は完全に裏切られざるをえなかつた。

他者と遭遇して本来の性格が変容してしまったのか、それとも所属する共同体を離れた時にはじめて真の性格が姿を現したということなのか、真偽のほどは定かではないが、いずれにせよ、矢崎は上海での体験を通じてこれまでの日本人観を改めざるを得なくなったのである。矢崎の立場は第五節で概観したように、いわゆる日本主義者が提唱する「日本的なるもの」観を一つ一つ潰していく体のものであった。その代表が長谷川如是閑の「話せばわかる」論であり、佐藤春夫の「もののあはれ」論であったことは確認したとおりである。

矢崎は現実の中国人の現状を観察する中で、日本的性格について再認識を余儀なくされた。たとえば、中国人の「没有法子（仕様がないといふ中国の虚無感）」に言及した上で、次のように述べている。

魯迅さへ没有法子といふ中国人の虚無感にはただならぬ嫌厭の言葉を絶えず洩らしてゐたといふが、天災と飢饉が植ゑつけたこの諦観は日本的『もののあはれ』や仏教に培はれた独善的な諦観とは伝統も本質も隔りがあるだらう。中国人の現状を目の当たりにして、俯瞰的な視野から日本的なるものを見ることができるようになったのであろう。あれほど批判していた「もののあはれ」論をあっさり受け容れているのである。同じことは「話せばわかる」論についても言える。

日華のあらゆる折衝が条文的で規矩を重んずる日本的性格と、自由で包容性がときに放漫にさへ変ずる中国的性格と相剋するのは当然である。中国における模々糊々の観念が表現の的確さといふことを重んじないからだ。日本的性格に映るかれらの嘘は真実の包容性のひろさである場合が多いのだ。「話せばわかる」といふのが日本的性格とすれば、中国の性格は互ひに「話さずしてわかる」であり「話して詮議を細かにすれば結局嘘を云はねばならぬ」のである。限定、限界、的確などといふ言葉は中国の伝統意識は培養させなかつたのである。

ここでも現地を実見した上での大局的見地から、日中比較文化論に及んでいる。「規矩を重んずる」日本的性格と、「自

由で包容性」がある中国的性格という対立構造の枠組みでとらえ、これを「話せばわかる」日本的性格と、「話さずしてわかる」または「嘘を云はねばならぬ」中国的性格という対比にスライドさせている。「日本的なるもの」を抽象的に論じていた時には「話せばわかる」という特質に疑いの目で見ていた矢崎も、中国人の思考法や行動様式を実見するに及んで、この「日本的性格」を完全に受け容れることになったのであろう。

昭和十二年の下半期になり、「日本的なるもの」の議論は下火になってきた。一つにはメディアの関心が移り変わったからであり、一つには論者の認識が変化したからである。そして、それらを引き起こした原因は盧溝橋事件を発端とする北支事変であったと推定される。だが、より長い目で見た場合、それ以外にも要因を見出すことができる。それについては次節で見ていくことにしたい。

七、昭和十二年下半期の転機（下）

「日本的なるもの」の論者の一人でもあった戸坂潤は、昭和十二年の年末に、この文化現象を総括して次のように述べている。(注14)

> 日本文化の問題は今後益々論じられて行くと思はれる。「日本的なるもの」を何か定性分析のやうに検出しようといふ企ては明らかに失敗した。折角検出できたと思はれたものも、日本にだけ固有なものではなかつたり、日本古来のものでなくて偶々或る時代の日本のものでしかなかつたり、現代の日本と無関係なものであつたり、日本の民衆の与り知つたものでなかつたりしたからである。だからかういふ形の日本文化探究は、もう時を失つた。

戸坂は各論客が繰り広げた論説を簡潔にまとめている。「日本的なるもの」に関する議論の総括として、きわめて冷

静な観察と鋭い考察を含む評価であると言ってよい。要するに、「日本的なるもの」の議論は飽和状態にあって、出るべき論点は出尽くしたというわけである。流行のテーマが「時を失つた」経緯がよくわかる。昭和十二年の論壇の年末総括にふさわしい言説であると言えよう。

さて、歴史上の出来事は必ずしも単線的に進展していくものではない。何事かが生起した場合、その原因は必ずしも一つとは限らず、複数の要因が複合的に絡み合って一つの出来事を引き起こすものである。「日本的なるもの」の議論が下火になったのは、盧溝橋事件に端を発して対外戦争に突入していったことだけが原因ではない。今見たように、議論が出尽くしたことも原因の一つである。さらに、一定数の論者が官憲の手により拘束、あるいは執筆禁止命令を受けたことも大きい。ここからは、「日本的なるもの」の論者のその後について略述したい。

象徴的なのは、前節の最後で言及した矢崎弾である。矢崎は『文藝』三月号と『新潮』九月号において「日本的なるもの」について論じている。その間、北支事変の直前に中国に渡航し、その経験を踏まえて認識が変化したことについては、確認したとおりである。実は『新潮』九月号の刊行と前後して、矢崎は警視庁特高一課に検挙され、取調べを受けていたのである。容疑は人民戦線運動に暗躍し、反戦的言辞を弄したことによる、軍刑法違反と治安維持法違反による。[注15] 東京地方検事局の取調べにより、深い思想的背景から出発したものではなく、単なる反戦的言辞であったことが判明し、昭和十三年十一月四日に起訴猶予処分となり、釈放された。[注16]「将来国策の線に沿つて行動する」ことを誓ったために事なきを得たという。いわゆる「転向」である。矢崎はその誓いの通り、『文芸の日本的形成』（昭和十六年二月）や『近代自我の日本的形成』（昭和十八年七月）といった書物を出版し、「日本的なるもの」という概念をめぐって、「国策の線に沿つて行動」したと言ってよい。昭和二十一年八月に四十歳で死去するまで、激動の戦中期を文筆家として活動した。

なお、ここで人民戦線事件について言及しておきたい。人民戦線運動は矢崎の検挙容疑でもあったが、それは昭和十年に行われたコミンテルン第七回大会の反ファッショ人民戦線の呼びかけに応えて人民戦線の結成を企てたとして検挙された事件である。[注17] 昭和十二年十二月十五日に第一次の検挙が行われ、翌年二月一日に第二次の検挙が行われて、五百名近くが拘束された。本稿で問題にした左の論者もその中に名を連ねている。

第一次人民戦線事件―大森義太郎・向坂逸郎（・矢崎彈）

第二次人民戦線事件―青野季吉

一人ずつ確認していこう。まず、大森義太郎は東京帝大退職後、マルクス主義運動の一派である労農派の指導者としてさまざまな媒体で評論活動をしたが、第一次人民戦線事件で検挙され、翌年に病気のために保釈されたが、昭和十五年に四十三歳で没した。次に、向坂逸郎は九州帝大退職後、労農派の論客として活動したが、第一次人民戦線事件で検挙され、昭和十四年に保釈されたが、執筆禁止処分を受けてドイツ語書籍の翻訳で生計を立てた。第三として、青野季吉は、昭和十三年二月一日に第二次人民戦線事件により検挙され、翌年五月に保釈出獄したが、論考を発表する機会を失ったため、これを機に転向した。要するに、人民戦線事件の余波を受けて彼らの反体制的発言はなりを潜めたわけである。

この時期に言論統制を受けたのは、むろん人民戦線運動に関わった者たちだけではない。昭和十二年十二月二十七日、内務省警保局図書課の開いた懇談会の席上で、執筆禁止処分を発表したのである。作家では中野重治と宮本百合子、評論家では岡邦雄・戸坂潤・鈴木安蔵・堀真琴・林要の七名であった。[注18] 本稿に関わる著者としては、宮本百合子と戸坂潤の二人が該当する。二人は雑誌メディアに執筆する機会を失うことになったのである。

宮本は昭和十二年末に「今日の文学の展望」と題する論考を執筆し、三笠書房『発達史日本講座』第十巻「現代研究」

に掲載予定であったが、作品発表禁止の措置のために発表されることがなかった。原稿は宮本の没後に発見されたという。[注19] そこから一年半ほどは作品の発表が全く不可能になった。また、戸坂は執筆禁止処分を甘受し、旺盛な評論活動を発表する媒体を失った。奇しくも本節冒頭で取り上げた年末総括がメジャー誌の最後の仕事となったわけである。さらに、昭和十三年二月には、戸坂潤や岡邦雄を中心とする唯物論研究会が解散を余儀なくされた。これを受けて、月刊誌『唯物論研究』は三月号をもって廃刊となった。それにともなって左派系知識人の活動拠点は縮小されていったのである。

以上で見たように、昭和十二年下半期は、主に治安維持法による言論統制によって、上半期に盛んに活動していた左派系知識人が次々と論壇から退場した。その結果、激論が闘わされた「日本的なるもの」というテーマは、文字通り片翼を失い、失速していったのである。

八、結語

「日本的なるもの」というテーマにとって、昭和十二年は特異点であった。上半期には総合評論雑誌を中心に特集が組まれ、多くの座談会が設けられた。保守派評論家と左派系知識人との論戦は火花を散らして、相互批判を繰り広げた。百家争鳴にして百花繚乱たる光景と言ってよい。

ところが、下半期に入って事態が急変する。七月に北支事変が勃発してメディアの関心が移行し、総合雑誌は対中外交をはじめとする国際問題にシフトした。さらに、治安維持法による言論統制が本格化し、左派系知識人が続々と検挙され、多くの論客が執筆禁止となった。要するに、論壇から左派系知識人が退場していったのである。そうなると、論

壇はきわめていびつな構成となり、思想的バランスを失うこととなった。白熱した議論が勢いをなくした背景には、そのような事情があったのである。

〔注〕

（1）河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉―横光利一と保田與重郎』（花書院、平成二十一年三月）参照。

（2）古矢篤史「横光利一「旅愁」と「日本的なもの」の盧溝橋事件前夜―一九三七年の「文学的日本主義」とその「先験」への問い」（『昭和文学研究』六十四集、平成二十四年三月）参照。

（3）中條は論題を「文学における今日の日本的なるもの」と改め、『昼夜随筆』（白揚社、昭和十二年四月）に収録した。

（4）引用は『宮本百合子全集』第十一巻（新日本出版社、昭和五十五年一月）による。

（5）中河や保田の万葉集論考は、後に中河與一『万葉の精神』（千倉書房、昭和十二年七月）や保田與重郎『万葉集の精神―その成立と大伴家持』（筑摩書房、昭和十七年六月）などに集成される。

（6）鈴木健一『佐佐木信綱―本文の構築』（岩波書店、令和三年二月）参照。

（7）国学が中世を黙殺する傾向については、拙著『本居宣長の国文学』（ぺりかん社、平成二十七年十二月）参照。

（8）加藤悦郎は東京朝日新聞の昭和十二年三月三日朝刊に「日本的なるもの」と題して、一コマ漫画を載せている。そこには二人の男性が描かれている。一人は十二単をまとった丸メガネの男性（袂には「日本的」と書かれている）で、原稿用紙とペンを前に置いて手鏡を眺めている。一方、もう一人の男性（肩口には「民族的」と書かれている）は古代の戦闘服を着て鉾のようなものを着て、姿見を眺めている。そこに「「今春の流行」で終るのでなければ大変結構ですが…」と解説が付けられている。この予言は当たったのである。

(9) 戸坂は「日本主義の文学化—本年度思想界の動向【中】」(『報知新聞』昭和十二年一月十四日)の中で、「文学的日本主義」の代表として小林秀雄を批判する際に、日本の民衆の優位性を称揚しつつ、日本の伝統が民衆の中にこそ息づいていることを論じている。小林の戸坂評はこれを受けたものと思われる。なお、小林と戸坂の論争については、森本淳生『小林秀雄の論理—美と戦争』(人文書院、平成十四年七月)参照。

(10) 保田は後に文学者の表現意欲を論じる中でも、「たしかに江戸の戯作者ではそれが消えてゐた。しかし浪士の心の中ではつひに燃えつゞけた」と述べている。

(11) 盧溝橋事件に始まる日中の戦争は、当初「北支事変」と称したが、翌月に上海で起きた第二次上海事変を含めて「支那事変」乃至は「日華事変」と呼ばれ、現在では日中戦争としている。ここでは、昭和十二年七月現在の呼び名である「北支事変」に統一することにする。

(12) 加藤陽子『満州事変から日中戦争へ—シリーズ日本近現代史⑤』(岩波新書、平成十九年六月)参照。

(13) 「インテリ大衆」は戸坂潤『読書論』などの著作にも頻出する。

(14) 読売新聞昭和十二年十二月十日夕刊四面「「文化」の日本的観念をまづ検討すべし」による。

(15) 朝日新聞昭和十二年九月一日夕刊、および読売新聞昭和十三年六月二十五日夕刊による。

(16) 読売新聞昭和十三年十一月十五日夕刊による。

(17) 奥平康弘『治安維持法小史』(岩波現代文庫、平成十八年十二月)参照。

(18) 宮本百合子「一九三七年十二月二十七日の警保局図書課のジャーナリストとの懇談会の結果」(『宮本百合子全集』第十四巻(新日本出版社、昭和五十四年七月))参照。

(19) 『宮本百合子全集』第十一巻(新日本出版社、昭和五十五年一月)「解題」参照。